

## 看護系大学の臨地実習において実習指導者が実践している 看護教員との連携

Collaboration between Clinical Practice Instructors and Faculty Members during  
Clinical Training for Nursing University Students

馬場 好恵<sup>1)</sup>\*, 中島真由美<sup>1)</sup>  
Yoshie Baba, Mayumi Nakajima

キーワード 臨地実習, 実習指導者, 看護教員, 連携, 看護系大学

Key Words clinical training, clinical practice instructors, faculty members, collaboration, nursing university

### 抄 録

**目的** 看護系大学の臨地実習において実習指導者が実践している看護教員との連携について明らかにする。

**方法** 実習指導者5名を対象に半構造化面接を実施し、質的記述的に分析した。

**結果** 看護系大学の臨地実習において実習指導者が実践している看護教員との連携は、【既習の知識や技術を看護教員へ確認しながら指導する】【実習指導者の役割を意識して指導する】【看護教員に学生の情報を確認し学生像を捉える】【学生のレディネスに合わせた指導を看護教員と相談しながら指導する】【学生の経験を共有しながら指導する】【看護教員との指導に対する方向性のずれを調整する】【実習指導について省察しながら指導する】であった。

**考察** 実習指導者は、実習指導を進めていく上で看護教員と密に関わりながら指導に対する方向性のずれを調整するなどして効果的な実習指導へとつなげていた。今後は、実習指導者と看護教員が実習ごとの振り返りの機会を活用し、学生の学習支援方法について検討する必要がある。

---

1) 聖泉大学看護学部看護学科 School of Nursing, Seisen University

\* E-Mail baba-y@seisen.ac.jp

# I. 諸言

## 1. 背景

近年の医療技術の進歩に伴う高度化や複雑化、入院期間の短縮や在宅医療への移行など、医療ならびに看護を取り巻く環境は著しく変化している。看護系大学では、急速に進展する人口の超高齢化や少子化、医療技術の高度化や社会の医療ニーズの多様化など、保健医療福祉を取り巻く状況の変化に対応した看護を提供できる人材の育成が求められている（日本看護系大学協議会, 2018）。看護基礎教育において臨地実習は、カリキュラムの約1/3を占め、学生の看護実践能力を育成する上で重要な学習の場である（高橋ら, 2009）。このような場において実習指導者が、患者の状況をその場で汲み取りながら、看護師がどう考え、行動するのかを学生に示していくことで、学生は患者に何が行われているのかを目の当たりにし、看護実践の意味を知り、看護実践能力を修得していく（新井, 2015）。学生は、看護師が行っている看護活動の実際や学生に対する教育的な関わりを通して看護のモデル行為を学ぶ機会となり、看護師の役割モデルに刺激を受け学習意欲を向上させるため、臨地実習での教育効果は大きい（本田ら, 2016）。しかし、患者の安全・権利擁護の観点から、臨地実習中に学生が経験できる援助の範囲は縮小している。このような現状から、教育現場と臨床現場の双方の協力のもとで教育体制を整え、実践力や教育力を備えた看護職の育成に取り組んで、看護基礎教育の質向上を目指す（林ら, 2016）ことが重要である。学生が将来看護職者として個々の能力を開発、維持・向上し、自らキャリアを形成するためには、看護基礎教育から卒業・継続教育へと継ぎ目のない教育体制を整えていくことが、看護基礎教育に携わる教員と臨地で教育に携わる者の重要な役目（阿部ら, 2018）といえる。そこで、学生が看護の学びを深めるためには、実習環境の中で看護教員や実習指導者が意図的にかかわること、看護教員と実習指導者が実習目的や役割を理解し、互いにフォローしながらコミュニケーションを十分にとり共通認識していく（吉川ら, 2017）ことがより一層重要である。実習指導者と看護教員との連携に関する先行研究では、連携の必要性（氷見ら, 2017）や連携に求める内容について（徳永, 2014）報告されている。

しかし、看護系大学の臨地実習において実習指導者が実践している看護教員との連携について具体的な内容までは明らかとなっていない。そこで本研究では、実習指導者と看護教員が連携しながら学生への効果的な指導を可能にするために、実習指導者が連携についてどのように捉えて取り組んでいるのかを明らかにすることを目的とする。そして、実習指導者と看護教員の連携を強化し、効果的な実習指導の在り方を検討するうえでの示唆を得たいと考える。

## 2. 用語の操作的定義

- 1) 連携：実習指導者が学生の実習目的・目標達成に向けて看護教員と共に行う行動や思考とする。
- 2) 実習指導者：保健師助産師看護師実習指導者講習会（以下講習会）を受講し、指導経験1年以上かつ看護師経験5年以上の看護師とし、実習指導に専従している者とする。

# II. 方法

## 1. 研究デザイン

質的記述的研究

## 2. 調査期間

2018年8月～9月

## 3. 研究対象者

看護系大学の臨地実習を受け入れている滋賀県内の400床以上の病院に所属する実習指導者で、本研究の趣旨に同意が得られた者5名とした。尚、選定条件として担当実習が限定されることや、自身の指導経験を語る事が難しいと考えられる指導経験1年未満の実習指導者は除外した。

## 4. データ収集方法

インタビューガイドに基づいて半構成的面接を行った。面接内容は研究対象者の許可を得てICレコーダーに録音した。面接場所は、研究対象者が所属する病院内の個室で行った。面接内容は、まず基本属性（年齢、看護師経験年数、実習指導者経験年数、担当実習）を聴取した。そのうえで、連携についての捉え方や取り組みを明らかにするため、1) 看護系大学の臨地実習における実習指

導者の役割, 2) 連携について自身の考え方や意識, 3) 連携に関し取り組んでいること, 4) 連携に関して困った場面や状況, 5) 連携に向けた課題について尋ね, その場面の状況や話された内容について掘り下げて尋ねた。また, インタビュー中のメモは最小限にし, 研究対象者の語りを聞くように心がけた。

## 5. 分析方法

インタビューで得られたデータを逐語録に起こし, 繰り返し丁寧に読み内容を理解した。実習指導者が実践している看護教員との連携について語られた内容の意味が読み取れる最小単位に分け, 分析の単位とした。次に, 実習指導者が実践している看護教員との連携を解釈して整理し, 特徴を反映させた言葉でコード化した。その後, 全コードの類似性, 相違性により, サブカテゴリー, カテゴリーと抽象化した。研究の分析過程では, 質的研究の経験者のスーパーバイズを受け, 研究者2名で内容を検討し真実性の確保に努めた。

## 6. 倫理的配慮

本研究は聖泉大学人を対象とする研究倫理委員会の承認(承認番号: 018-008, 承認日: 2018年9月13日)を得ている。研究協力機関の施設長ならびに看護管理者に対し研究の趣旨を説明し, 研究参加に同意が得られた研究機関の施設長ならびに看護管理者に研究対象者の紹介を受けた。研究対象者に対しては, 研究の趣旨, 参加拒否の権利, また途中で研究への協力を辞退しても研究対象者に不利益が生じないこと, 得られたデータは匿名性を保持し厳重に管理することや研究目的以外は使用しないこと, 学会や論文発表の公表, 連絡先について文書および口頭で説明し, 同意書にて承諾を得た。インタビューの際には, プライバシーが保持できるよう個室で行い, 録音と記録を確認した。また, インタビューによる時間的負担や精神的影響に配慮しながら実施した。

## III. 結果

### 1. 研究対象者の概要

本研究に同意が得られた研究対象者は, 5名であった。研究対象者の基本属性を表1に示す。研究対象者の年齢は30~40歳代, 性別は女性4名, 男性1名であった。看護師経験年数は12~17年(平均16.3年), 実習指導者経験年数は2~6年(平均3.8年), 担当実習は, 基礎看護学実習, 成人看護学実習であった。面接回数は1人1回で, 面接時間は45~68分(平均51.4分)であった。

### 2. 看護系大学の臨地実習において実習指導者が実践している看護教員との連携

分析の結果, 看護系大学の臨地実習において実習指導者が実践している看護教員との連携について98コードが得られ, さらに抽象度を高め, 19サブカテゴリー, 7カテゴリーを生成した。分析の結果を表2に示す。以下にカテゴリーについて説明する。文章中の【 】はカテゴリー, 『 』はサブカテゴリー, < >はコードを示す。

#### 1) 【既習の知識や技術を看護教員へ確認しながら指導する】

このカテゴリーは3つのサブカテゴリー, 15つのコードで構成された。

実習指導者は, 実習指導を行う上で<基本的に看護過程や援助は学生が大学で学んできたことを看護教員へ確認しながら指導する>と語っており『学生が大学で学んできたことを基に患者への看護を通して学びを深める』ことを実践していた。実習指導者は<大学の実習目的に沿った患者を選択できるように配慮する>ことや<学生が実施する援助内容について看護教員に確認して実施する>と語っており『実習における大学の意向を確認し指導内容を考える』などして【既習の知識や技術を看護教員へ確認しながら指導する】ことを実践していた。

表1 研究対象者の概要

	年齢	性別	看護師年数(年)	実習指導年数(年)	担当実習	面接時間(分)
A氏	40歳代	女	17	2	成人	65
B氏	30歳代	女	16	4	基礎・成人	70
C氏	30歳代	女	17	3	成人	68
D氏	30歳代	男	12	4	基礎・成人	45
E氏	40歳代	女	17	6	基礎・成人	50

表2 看護系大学の臨地実習において実習指導者が実践している看護教員との連携

カテゴリー (7)	サブカテゴリー (19)	コード (98)
既習の知識や技術を看護教員へ確認しながら指導する	学生が大学で学んできたことを基に患者への看護を通して学びを深める	<ul style="list-style-type: none"> <li>・基本的に看護過程や援助は学生が大学で学んできたことを看護教員へ確認しながら指導する</li> <li>・事前の大学との打ち合わせで、学生がどこまで学んでいるのかを確認し、大学で学んだことを基にして、現場と既存との違いを伝える</li> <li>・受け持ち患者を通して実際の看護の展開を伝えられるように意識している</li> <li>・大学で学んだことをもとにして、患者さんの反応を取り入れながら大学で学んできたことに加えて修正する</li> <li>・臨床で学んだことが大学での学びを発展できるように指導する</li> </ul>
	実習における大学の意向を確認し指導内容を考える	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大学の实習目的に沿った患者を選択できるように配慮する</li> <li>・学校ごとに実習目標として求めているものが異なるので、大学の方針に合わせる</li> <li>・実習前に学生の実習到達目標について看護教員とすり合わせる</li> <li>・学生個々に応じて実習到達目標を確認し相談する</li> <li>・学校ごとに考え方、方法が異なるため事前の打ち合わせで方針を念入りに確認する</li> </ul>
	学生の援助内容を看護教員に確認してもらってから実施する	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学生が実施する援助内容について看護教員に確認して実施する</li> <li>・援助をする前に計画を確認してから看護教員にも実施前に確認するよう意識している</li> <li>・どこまでを学生にやってもらっていいか、実施前に看護教員に聞いている</li> <li>・学生が立案した援助計画を看護教員と一緒に確認する</li> <li>・学生ができる援助の内容に迷うことがあるので看護教員に事前に確認する</li> </ul>
実習指導者の役割を意識して指導する	学生が行う患者への援助に対する責任を持ち指導する	<ul style="list-style-type: none"> <li>・患者の状態を観察し学生の看護計画の実施について判断する</li> <li>・実際の援助場面を通して患者の反応を学生にフィードバックする</li> <li>・術後の援助や観察は実習指導者が主体で入り学生の様子を看護教員へ伝える</li> <li>・学生が実施する患者への援助は、実習指導者が主導権を持つ</li> </ul>
	患者への援助を通して学生が学びを得られるように指導する	<ul style="list-style-type: none"> <li>・受け持ち患者を通して看護を考え導けるように看護師のロールモデルとして意識しながら指導している</li> <li>・実際の援助を通して学生の学びを深めるのは実習指導者の役割で、習ったことと結びつける過程は看護教員の役割である</li> <li>・実際の場面を経験できるように持って行くのは実習指導者で、それを文章化、言語化しながら学生の学びへと結びつけるのが看護教員である</li> <li>・臨床では実際に行われている看護から学生が学びを得られるように場面を選択する</li> <li>・臨床ではできるだけ学生にたくさんの経験をしてもらえようように病棟の環境を調整している</li> <li>・実習指導者の役割として看護師になっていくきっかけを作れたいと思っている</li> </ul>
看護教員に学生の情報を確認し学生像を捉える	学生の情報を看護教員へ確認し学生を理解する	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学生の理解や考えが十分に把握できていないことがあるため学生の状況を看護教員へ確認する</li> <li>・学生への指導で困ったときは看護教員へすぐに相談し学生の考えを確認する</li> <li>・学生の特徴を看護教員へ確認しながら指導する</li> <li>・指導をしていく上で学生像を捉えて進めていくことを大切にしているので確認してから指導方法を考えている</li> <li>・学生のことを理解するために看護教員からの情報を活用している</li> </ul>
	実習指導に必要なことを看護教員に確認する	<ul style="list-style-type: none"> <li>・指導に必要な情報のみを事前に看護教員へ聞いて指導に取り入れている</li> <li>・実習指導を行う上で必要な情報を得るようにしている</li> <li>・学生個々の性格とか能力とかは十分にわからないので看護教員に確認して学生に応じた指導ができるように意識している</li> </ul>
学生のレディネスに合わせた指導を看護教員と相談しながら指導する	実習指導をしていく上での悩みを看護教員と共有する	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学生のレディネスに合わせた指導方法を相談する</li> <li>・実習が上手く進めていない学生の実習到達目標を看護教員に相談する</li> <li>・実習がうまく進められていない学生に対する指導はその都度看護教員に相談している</li> <li>・記録面で書けていない時は、まずは看護教員に相談する</li> <li>・看護教員とのやりとりの中では、臨床での患者の状況の変化に学生が対応できるように情報交換する時間を作っている</li> <li>・病棟に看護教員が常にいることで困ったときはすぐに相談できるように意識している</li> <li>・毎日必ず実習の状況を看護教員へ報告するよう機会を設けている</li> <li>・指導をしていく上で、自分の指導がこれでいいのか迷うことがあるのでこのままの指導でいいか看護教員に相談している</li> <li>・学生の様子を先生から聞いてくれるので指導をしていく上でタイムリーに相談できている</li> </ul>
	学生の進行状況を看護教員へ確認しながら指導する	<ul style="list-style-type: none"> <li>・指導が難しい学生に対しては看護教員の意見や考えを確認し自己の指導に取り入れる</li> <li>・学生の受け持ち患者の選択は、必ず看護教員へ相談してから決定している</li> <li>・指導の方向性や方法を看護教員と相談しながら学生の状況に合わせて指導方法を考えている</li> <li>・実習開始時に大体の指導の進め方を考えているが状況に合わせて学生への指導内容や方法を見直している</li> <li>・学生の進行度に応じて指導できるように看護教員と学生のゴールを相談する</li> <li>・学生の状況を見ながら指導内容の変更を看護教員と判断しながら進める</li> </ul>
学生のスケジュールを看護教員と調整する	学生のスケジュールを看護教員と調整する	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学生の援助に入るときは学生のスケジュール表を用いて看護教員と分担する</li> <li>・朝の申し送り時には看護教員と学生の1日の動きを共有する</li> <li>・援助が重なるときは看護教員と相談して、患者の状況に応じて看護教員に入ってもらいように調整する</li> </ul>

表2 看護系大学の臨地実習において実習指導者が実践している看護教員との連携（続き）

カテゴリー (7)	サブカテゴリー (19)	コード (98)
学生の経験を共有しながら指導する	実習中の学生の状況を看護教員へ伝えながら指導する	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 学生が援助を行う時は看護教員へタイムリーに状況を伝える</li> <li>・ 学生の計画が上手く進んでいるか看護教員にも確認してもらいながら指導する</li> <li>・ 患者との関わりの場面における学生の様子を看護教員に伝える</li> </ul>
	実際の援助場面と一緒に看護教員に入ってもらう	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 看護教員が学生の援助場面に入ってもらう、学生の考えや行動を看護教員にも確認してもらうことで援助後の指導の視点が広がる</li> <li>・ 指導に悩んでいる学生に対して看護教員も学生の援助に入って実際に見てもらえる機会を作る</li> <li>・ 学生の援助場面を看護教員にも見ってもらうように調整する</li> <li>・ 看護教員との意見交換や情報共有をスムーズにするために実際の学生の援助場面を看護教員に見てもらう</li> <li>・ 指導を進めていく上で援助に看護教員が入ることでこちら側の指導の意図が伝わる</li> <li>・ 実際の学生の援助場面を共有することで指導が進めやすい</li> </ul>
看護教員との指導に対する方向性のずれを調整する	実習指導を行う上で看護の方向性をすり合わせる	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 実習指導を進める上で看護計画の内容を確認し修正できるよう導く</li> <li>・ 患者の看護の方向性を学生と看護教員に伝えて指導の方向性を確認する</li> <li>・ 実習を進めていくにあたり、大学としての目標と学生個々の目標が達成できるよう看護教員と実習指導者も同じ方向を向いていく</li> <li>・ 学生が看護過程を展開する上で必要な患者の情報は事前に看護教員へ伝える</li> <li>・ 看護教員と実習指導者が患者の目指しているゴールをすり合わせながら学生への指導を進める</li> <li>・ 具体的に指導の方向性は看護教員とすり合わせる</li> </ul>
	実習後には看護教員と指導内容を確認する時間を設ける	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 実習後に学生の状況を看護教員に報告し翌日の指導方法を考える</li> <li>・ 実習後に看護教員と話す時間を持つようにしている</li> <li>・ 翌日の患者の大体の予定を看護教員に伝えている</li> <li>・ 学生の实習計画を前日に確認し看護教員と共有している</li> <li>・ 実習後には看護教員と指導内容を確認する時間を設ける</li> <li>・ 学生が帰ってから翌日の指導内容を看護教員に確認する時間を毎日設ける</li> <li>・ 翌日の患者のスケジュールと学生のスケジュールを確認する</li> <li>・ 学生に指導したことは必ず看護教員へ伝える</li> <li>・ 学生が帰宅してから話す時間、情報共有する時間を作るように意識している</li> <li>・ 短時間であっても毎日学生の実習状況を看護教員へ報告し翌日の指導内容を確認する</li> </ul>
	学生への指導の方向性を確認し指導内容を修正する	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 学生へ良いタイミングで的確な指導ができるように看護教員にタイムリーにコミュニケーションをとりながら指導内容を修正する</li> <li>・ 学生個々に進捗度も異なるので、学生の目標を確認したり情報を共有し指導内容を修正する</li> <li>・ 看護教員と実習指導者の指導の方向性が違くと学生も混乱するので看護教員とのコミュニケーションをとり互いの指導内容を伝える</li> <li>・ 学生の理解や考えを看護教員にも確認してから指導内容を見直す</li> <li>・ 看護教員個々によって考え方が異なるため指導の方向性がずれないように意識しながら指導している</li> </ul>
指導した後の学生の理解の確認やその後のフォローを看護教員へ依頼する	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 看護教員へ学生に指導した内容を伝え、その後の学生の理解を確認してもらうよう依頼する</li> <li>・ 記録面での指導は、学生の力量や性格に応じた指導をしてもらう</li> <li>・ 学生に指導の意図が伝わらないと感じる時には看護教員にも伝えて一緒に学生への指導を行う</li> <li>・ 一方的に学生に指導するのではなく、指導した内容は看護教員にも伝えて学生のフォローをしてもらう形をとる</li> </ul>	
実習指導について省察しながら指導する	実習の振り返りでは学生の状況を看護教員へ伝える	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 学生のできていたことを看護教員と共有する</li> <li>・ 実習の振り返りでは学生の実習の様子についてこちらが考えていることを伝える機会を持つ</li> <li>・ 実習評価では記録からは見えない実施面での患者の関わりを看護教員に伝えるように意識する</li> </ul>
	実習後の学生の学びを看護教員に確認する	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 自分の指導したことが学生にどう影響しているのか知りたいので看護教員に聞くようにしている</li> <li>・ 実習後の学生の成長を看護教員に確認するようになっている</li> <li>・ 学生の学びを看護教員と共有する機会をもつ</li> <li>・ 実習で学生がどのように学んだのか気になるので看護教員に確認するようになっている</li> <li>・ 実習指導の経験を重ねることで指導の進め方が掴めてきたが学生の学びについては気になるためその都度看護教員に聞いている</li> </ul>
	実習指導を振り返り次の指導につなげる	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 実習指導者として指導していく上で困ったことや課題について看護教員と共有し次の指導方法を共に考える</li> <li>・ 学生が大学で学んでいる内容を看護教員へ確認し自己にて学び直す</li> <li>・ 実習最終日には次回の実習のあり方や方法について相談している</li> <li>・ 実習ごとの振り返りでは、看護教員へ自己の指導内容について確認する</li> <li>・ 大学での研修会や実習の振り返り会に参加して自己の指導を振り返る機会を作る</li> </ul>

## 2) 【実習指導者の役割を意識して指導する】

このカテゴリーは2つのサブカテゴリー、10つのコードで構成された。

実習指導者は、学生が実際に援助を行う時は<患者の状態を観察し学生の看護計画の実施について判断する>と語っており『学生が行う患者への援助に対する責任を持ち指導する』ことを実践していた。実習指導者は、<受け持ち患者を通して看護を考え導けるように看護師のロールモデルとして意識しながら指導している>と語っており『患者への援助を通して学生が学びを得られるように指導する』などして【実習指導者の役割を意識して指導する】ことを実践していた。

## 3) 【看護教員に学生の情報を確認し学生像を捉える】

このカテゴリーは2つのサブカテゴリー、8つのコードで構成された。

実習指導者は、実習指導を進めていく中で<学生の理解や考えが十分に把握できていないことがあるため学生の状況を看護教員へ確認する>と語っており『学生の情報を看護教員へ確認し学生を理解する』ことを実践していた。さらに、実習指導者は、<指導に必要な情報のみを事前に看護教員へ聞いて指導に取り入れている>と語っており『実習指導に必要なことを看護教員に確認する』などして【看護教員に学生の情報を確認し学生像を捉える】ことを実践していた。

## 4) 【学生のレディネスに合わせた指導を看護教員と相談しながら指導する】

このカテゴリーは3つのサブカテゴリー、18のコードで構成された。

実習指導者は、指導が上手く進められない時には<学生のレディネスに合わせた指導方法を相談する>と語っており『実習指導をしていく上での悩みを看護教員と共有する』ことで指導方法を変更していた。また、実習指導者は<指導が難しい学生に対しては看護教員の意見や考えを確認し自己の指導に取り入れる>と語っており『学生の進行状況を看護教員へ確認しながら指導する』などして【学生のレディネスに合わせた指導を看護教員と相談しながら指導する】ことを実践していた。

## 5) 【学生の経験を共有しながら指導する】

このカテゴリーは2つのサブカテゴリー、9つのコードで構成された。

実習指導者は、<学生が援助を行う時は看護教

員へタイムリーに状況を伝える>と語っており『実習中の学生の状況を看護教員へ伝えながら指導する』ことを実践していた。さらに実習指導者は、<看護教員が学生の援助場面に入ってもらい、学生の考えや行動を看護教員にも確認してもらうことで援助後の指導の視点が広がる>と語っており『実際の援助場面と一緒に看護教員に入ってもらい』などして、看護教員と【学生の経験を共有しながら指導する】ことを実践していた。

## 6) 【看護教員との指導に対する方向性のずれを調整する】

このカテゴリーは4つのサブカテゴリー、25のコードで構成された。

実習指導者は、<看護教員と実習指導者が患者の目指しているゴールをすり合わせながら学生への指導を進める>と語っており『実習指導を行う上で看護の方向性をすり合わせる』ことを実践していた。また、実習指導者は<学生へ良いタイミングで的確な指導ができるように看護教員にタイムリーにコミュニケーションをとりながら指導内容を修正する>と語っており『学生への指導の方向性を確認し指導内容を修正する』などして【看護教員との指導に対する方向性のずれを調整する】ことを実践していた。

## 7) 【実習指導について省察しながら指導する】

このカテゴリーは3つのサブカテゴリー、13のコードで構成された。

実習指導者は、実習指導の終盤には<学生のできていたことを看護教員と共有する>と語っており『実習の振り返りでは学生の状況を看護教員へ伝える』ことを実践していた。実習終了後には<自分の指導したことが学生にどう影響しているのか知りたいので看護教員に聞くようにしている>と語っており『実習後の学生の学びを看護教員に確認する』ことを実践していた。実習指導者は<大学での研修会や実習の振り返りに参加して自己の指導を振り返る機会を作る>と語っており『実習指導を振り返り次の指導につなげる』など【実習指導について省察しながら指導する】ことを実践していた。

## IV. 考 察

### 1. 看護系大学の臨地実習において実習指

### 導者が実践している看護教員との連携

実習指導者は、大学との事前打ち合わせの機会を活用し【既習の知識や技術を看護教員へ確認しながら指導する】ことを実践していた。安酸(2015)は、学生の実習目標達成に向けて「指導教員から実習指導者に学習準備状況や学習支援上の配慮を伝えておくことは重要である」と述べている。実習指導者が実習目標や学生の学習状況を把握する機会を持ち、情報を提供することは、学生の実習目標達成に向けた効果的な指導へとつながる。実習指導を行う上で実習指導者は【実習指導者の役割を意識して指導する】ことを実践していた。実習指導者は、ただ単に看護技術の指導を行うだけではなく、学生が看護に対する関心と意欲を高めることができるように看護のロールモデルとしての存在であることを意識して指導することが重要である。実習指導を進めていく中で実習指導者は【看護教員に学生の情報を確認し学生像を捉える】ことや【学生のレディネスに合わせた指導を看護教員と相談しながら指導する】ことを実践していた。学生が実習目標を達成するためには、実習指導者が学生への理解を示した上で学生が看護実践を通し自身の看護をイメージ化させる働きかけが必要である(沖田ら, 2015)。そのため、実習指導者は看護教員へ情報を確認しながら学生理解を深め、個々の学生に応じた指導を提供していた。さらに実習指導者は看護教員と【学生の経験を共有しながら指導する】ことを意図的に行っていた。これらの関わりにより、実習指導者と看護教員とが各々の役割を発揮し、学生の実習目標達成という共通認識を持ちながら指導することができる。その一方で、実習指導者は実際の指導場面で迷いを感じ、看護実践をしながらの慣れない学生指導へのストレスを抱えている(久保, 2017)などの課題も報告されている。本研究では、このような状況にある時には実習指導者は【看護教員との指導に対する方向性のずれを調整する】ことを実践していた。学生が看護実践を通して学びを深めるためには、実習指導者と看護教員が実習指導についてタイムリーに話し合える機会を設けられる環境を整えることが重要であるといえる。また、実習指導者は【実習指導について省察しながら指導する】ことを実践していた。このように、実習指導者が、自分の指導を確かめるリフレクションの機会を得ることは、自己の成長だけでなく、不安

なく安心感をもって指導することにつながり、学生の実習での学びに与える影響もきわめて大きい(屋宜ら, 2014)。実習指導者は、自己の実習指導について振り返ると共に実習で学生が学んだことを看護教員へ確認することで、効果的な実習指導へとつなげていたと考える。

### 2. 看護系大学の臨地実習において実習指導者と看護教員との連携のあり方

近年の医療技術の進歩によって、医療の高度化や複雑化、入院期間の短縮、高齢患者の増加、在宅医療への移行等、医療ならびに看護を取り巻く環境は著しく変化しており、学生が実習期間を通して一人の患者を受け持つことが難しくなっている。これらの背景をふまえて、実践現場に身をおいた学生が主体的に思考、判断、行動し学習効果を上げるためには、人的・物的教育環境の整備が必要不可欠である(安酸, 2015)。そのため、実習指導者と看護教員が臨地実習の目的や目標について十分な話し合いを持ち、共通認識のもと役割を分担し実習指導に携わる必要がより一層重要である。既に多くの施設において実習指導者と看護教員との実習指導者連絡会などを開催し、効果的な実習指導の内容を検討しているが、現行の実習指導者連絡会の機会を活用するだけでなく、実習指導者と看護教員が実習ごとに学生の実習目標達成状況や教育環境についてタイムリーに振り返りながら学習支援方法を検討していく必要がある。瀧口ら(2016)は、看護教員と実習指導者とが連携を図り学生の情報を共有しながら指導を行うとともに、看護教員は担当した学生のその後の成長と動向を可能な範囲で提供する必要性を述べている。本研究における実習指導者は、実習指導終了後も自身の指導内容を振り返り、学生への指導効果を看護教員へ確認していた。このように実習指導者は、学生の実習目標達成に向けた指導を提供できるよう、自身の指導を振り返りながらより良い指導へとつなげているものと考えられる。そして、実習指導者が実習指導を看護教員と共に省察する機会を提供するという意味でも、両者の連携は重要であり、これらの関わりは学生への効果的な実習指導につなげることができる。今後も実習指導者と看護教員とが互いに指導能力を高め合いながら、より密な実習指導体制の構築と学生への学習支援方法の検討を行うことが必要であると考え

る。

## V. 結 語

1. 実習指導者は、看護教員と学生の実習目標を達成できるように共通認識を持ち実習指導を実践していた。実習指導者は、指導に困った時は看護教員へ相談することや、実習指導について省察することで学生への効果的な実習指導へとつなげていた。
2. 実習指導者と看護教員は、学生への効果的な指導を提供できるような関係性を構築していくことが重要であり、学生の実習目標達成状況や教育環境を振り返る機会を作るなどして学習支援方法を検討していく必要性が示唆された。

## 利益相反

本研究における利益相反は存在しない。

## 謝 辞

本研究の参加に快諾し、ご協力いただきました実習指導者の皆様に心より感謝申し上げます。

## 文 献

- 阿部幸恵. (2018) : 看護基礎教育におけるシミュレーション教育の導入, 2-9, 日本看護協会出版会, 東京.
- 新井紗樹子. (2015) : 臨地実習指導者による看護実践のロールモデル行動, 北海道医療大学看護福祉学部学会誌, 11 (1), 19-26.
- 林みよ子, 横山しのぶ, 石橋かず代, 他. (2016) : 臨地実習に携わる看護職者の指導行動と協働についての認識—実習指導者・教員・一般看護師の比較—, 天理医療大学紀要, 4 (1), 1-14.
- 氷見純子, 出石幸子, 村口孝子, 他. (2015) : 新設 A 看護大学の成人看護学実習における臨地実習指導者の思い—4 過程の実習指導経験から大学教育の実習を受けるにあたって—, 鳥取看護大学・鳥取短期大学研究紀要, 72, 1-7.
- 本田輝子, 梶原江美, 小野聡子, 他. (2016) : 基礎看護学実習における臨地実習環境の実態, 西南女学院大学紀要, 20, 1-8.

- 久保幸代. (2017) : 指導のあり方を考えるための実習指導者研究会, 看護展望, 42 (2), 40-43.
- 日本看護系大学協議会. (2018) : 看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標, <http://www.janpu.or.jp/file/corecompetency.pdf>, [検索日2019年4月15日].
- 沖田聖枝, 影本妙子, 大屋まり子, 他. (2015) : 看護学生による実習指導者評価の変化に影響する要因, 川崎医療短期大学紀要, 35, 9-15.
- 高橋悦子, 松本千恵子, 池田光子, 他. (2009) : 臨地実習指導者が実習指導を通して抱く思い—アンケートの自由記述の分析より, 日本看護学会論文集 (看護教育), 40, 158-160.
- 瀧口美香, 渡邊貴子, 橋本美恵, 他. (2016) : 臨地実習における実習指導者のやりがい, 日本看護学会論文集 (看護教育), 46, 167-170.
- 徳永久美子. (2014) : 専任教員の考える臨地実習指導者との連携について—臨地実習指導者の経験がある専任教員の考える臨地実習指導者との連携, 神奈川県立保健福祉大学実践教育センター看護教育研究集録, 39, 74-80.
- 安酸史子. (2015) : 経験型実習教育—看護師をはぐくむ理論と実践, 26-31, 医学書院, 東京.
- 吉川明美, 橋本笑子, 加藤かすみ. (2017) : 看護学実習において実習指導者と連携するうえで看護教員が感じている困難の実態, 中国四国地区国立病院附属看護学校紀要, 13, 60-72.